『神の子となる恵みの世界』ヨハネ1:9-13

1:9 すべての人を照すまことの光があって、世にきた。
1:10 彼は世にいた。そして、世は彼によってできたのであるが、世は彼を知らずにいた。
1:11 彼は自分のところにきたのに、自分の民は彼を受けいれなかった。
1:12 しかし、彼を受けいれた者、すなわち、その名を信じた人々には、彼は神の子となる力を与えたのである。
1:13 それらの人は、血すじによらず、肉の欲によらず、また、人の欲にもよらず、ただ神によって生れたのである。

●序論
ヨハネによる福音書の執筆の目的について、先週も上げました。
　20:31 しかし、これらのことを書いたのは、あなたがたがイエスは神の子キリストであると信じるためであり、また、そう信じて、イエスの名によって命を得るためである。
特に、先週は、「信じてもらいたい」という筆者使徒ヨハネと、バプテスマのヨハネが証をしていたことに目を向けました。改めて何を信じてもらいたかったのでしょうか？
　ここにこうあります。「イエスは神の子キリストである」と信じることです。

そして今日読んでいるところでは、信仰者たちもまた「神の子となる力を与えられた者」であると表現されています。
これは神さまが用意してくださった神さまの情熱のこもった私たちへの祝福です。同じヨハネが、信仰の友に向けた手紙でこう記しています。
　　1ヨハネ3:1 わたしたちが神の子と呼ばれるためには、どんなに大きな愛を父から賜わったことか、よく考えてみなさい。わたしたちは、すでに神の子なのである。

●本論
Ⅰ．キリストを拒んだ人の物語
　まずキリストを光と語るヨハネの語り口を少し振り返りましょう。
　　1:1 初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。
　　1:2 この言は初めに神と共にあった。
　　1:3 すべてのものは、これによってできた。できたもののうち、一つとしてこれによらないものはなかった。
　　1:4 この言に命があった。そしてこの命は人の光であった。
　　1:5 光はやみの中に輝いている。そして、やみはこれに勝たなかった。
　キリストが最初からおられ天地万物をつくられた神であることを語りつくしています。
　　この方こそ、「人の光」であることを明らかにします。
　　そうして冒頭に引用したように、「20:31 しかし、…あなたがたがイエスは神の子キリストであると信じるため…」と証されていることが分かります。
　最近「宗教2世」の問題などで再び話題になり始めた旧統一協会やエホバの証人、加え

てモルモン教などでは、「イエスが神の子キリスト」であることを受け入れてはいません。自分たち独自の経典を聖書に並べてそれを信じている、だから異端と呼ばれます。
考えてみると、その異端の創始者たちは、聖書を知らないでいたのではなく、知り、また学びながら、自分のため、自分たちの都合や一部の人たちのために、聖書が示す「イエスが神の子キリスト」であることを拒んだ人たちなのです。
それは今日お読みしたイエスさま当時の人たちと根本部分で同じです。

1:9 すべての人を照すまことの光があって、世にきた。
1:10 彼は世にいた。そして、世は彼によってできたのであるが、世は彼を知らずにいた。
1:11 彼は自分のところにきたのに、自分の民は彼を受けいれなかった。

イスラエルの権力者たち、宗教者たち、そして長老たちなど、多くの人たちもまた、イエスさまを拒み、そればかりか憎しみをもって十字架につけて殺してしまいました。
ヨハネはキリストをめぐる人々の思いを示してこう語ります。
ヨハネ3:18-20
…信じない者は、すでにさばかれている。神のひとり子の名を信じることをしないからである。
3:19 そのさばきというのは、光がこの世にきたのに、人々はそのおこないが悪いために、光よりもやみの方を愛したことである。
3:20 悪を行っている者はみな光を憎む。そして、そのおこないが明るみに出されるのを恐れて、光にこようとはしない。

今の時代こそ、「光は闇の中に輝いている。そして、闇はこれに打ち勝たなかった」と証しされるまことの光が必要だと感じます。
世界で、そして身近で、人の悪意、欲望、やみの力が横行していることを思わずにはいられないからです。
イエスさまの時代のユダヤの指導者たちが、キリストをめぐって殺意に至ったような闇。また現代の異端が、キリストを拒んで異端を作り出したような闇。そして各地の争いの背景で、しばしば聖書がゆがんで利用されて、その悪意が正当化されるような闇。
そんな時代を生きるわたしたちだからこそ、聖書は、イエス・キリストを指し示します。「すべての人を照らすまことの光があって世に来た」と。

Ⅱ．キリストを信じた人の物語

1:12 しかし、彼を受けいれた者、すなわち、その名を信じた人々には、彼は神の子となる力を与えたのである。

ただイエスさまを受け入れること、信じることだけことだけで、わたしたちは神の子としての資格が与えられるという、これほどシンプルな福音はありません。またこれほどのラッキーなメッセージはありません。
「イエスさまは、わたしの救い主です。アーメン」と信じる。それだけです
しかし、このイエスさまの時代も、また後に福音書やローマ人への手紙が記されていた時代にも、そして今も、人は、この福音（Good News）を素直に受け入れることをしません。　いやそういうものに抵抗感を持ち、排除しようとする迫害の働きがあったこ

とが事実なのです。聖書に記されている通りです。

ヨハネ1:11-12（LB）

イエスさまは、ご自分の国に来ながら、ご自分の民に受け入れられなかったのです。この方を心から喜び迎えたのは、ほんのわずかな人たちだけでしたが、受け入れた人はみな、この方から神の子どもとなる特権をいただきました。それにはただ、この方が救ってくださると信じればよかったのです。

つくづく、わたしたち人の内にある「罪」という神さまに背を向けたがる性質はやっかいです。

今も世界には、イエスさまのことを知らないでも生きている人はたくさんおられます。そういう人々を見て、それでいいなら信じなくてもいい…という判断の仕方ではありません。

まわりが問題でも、多数決が判断の基準ではなく、信じるべきことが真理かどうかが大切なのです。

ヨハネは、まことの光をめぐるわたしたちの態度についてこうも記しています。

3:21 しかし、真理を行っている者は光に来る。その人のおこないの、神にあってなされたということが、明らかにされるためである。

この地上に遣わされたイエス・キリストの物語は、神さまの愛の真実を証しします。

その愛の光をめぐって、わたしたちの態度が問われるのです。それを信じ受け取るかどうかです。

私たちを、信じて生き、神の子、つまり神さまの子どもとして生きる祝福へと招いています。

Ⅲ．キリストがくださる物語

イエスさまが自分に向けられておられる愛を感謝して受け入れるとき、そこで同時に特別な関係をいただく。それが「神の子」となるということです。神さまを「お父さん」と呼ぶことのできる祝福を信じた人は受け取ります。

1:13 それらの人は、血すじによらず、肉の欲によらず、また、人の欲にもよらず、ただ神によって生れたのである。

人が設ける特別な条件によるのではありません。わたしたちが「神の子」と呼ばれる理由は、神さまが、イエスさまを心から信じる者たちを、そのような関係に迎え入れてくださったからです。

そうしてそのような、特別な関係が、わたしたちの人生の中での、揺るがない、損なわれない安心と自信と力となります。わたしを「子」と呼んでくださる神がいる。わたしも親しく「お父さん」と呼んでいることができる。

つまり「愛されていること」は、ただの知識で終わらない、今の人生を覆う、神さまとの生きた関係なのです。だから安心できる…というのです。

最近話題の異端の宗教2世と呼ばれる青年たちの苦しみは、その組織の折の中で、大人になっても自分たちで何も決められない、という檻に入れられている。

それはまさに「血筋により、肉の欲により、人の欲による…という、神さまの子と呼ばれるゆえの檻の中にいる、苦しむ姿が浮かび上がります。

一旦、その信仰から脱退すると、家族との関係も断たれるという話もありました。

しかし、イエスさまを救い主として信じて、本当に神の子とされた人たちには、赦しがあり、安心があります。
　神さまを「お父さん」と呼ぶことで安心を経験できるのです。
かつてイエスさまの時代の宗教者たちが、自分たちのつくりだした各種の伝承と戒律で、人々を断罪し、縛り、その教えをもって自分たちへの尊敬をつくりだして、神の恵みをゆがめていました。
　イエスさまは、そんな時代に、神からの無償の赦しを語り、その赦しと共に「安心して行きなさい」と人々を祝福して送り出すのです。

最後に）
今日、「神の子となる恵みの世界」と題しています。
ただイエスさまを救い主として信じて、神の子とされるという、一生もののの祝福をただ信じるだけで受け取ることができるという、それは神さまだけがくださることのできる「恵み」というより、他に表現のしようがありません。

わたしが伝道者になりたての小さな開拓伝道所で、神さまはひとりの女性を導いてくださいました。そしてその教会にとって最初に救われた女性となりました。
　その人は、実はエホバの証人の方でした。
　さて、その女性が教会に来てくださった、そのきっかけは、彼女の中学生の息子だったのです。いわゆる「宗教２世」でした。
　　するっと教会に入ってきて、聖書のお話や賛美の時を持ち、そしてその後、お母さんが導かれ、救われたのです。
今、宗教２世問題とか、社会問題が取り上げられてそこにあるハードルがあまりにも大きく思うような印象がありますが、神さまがなさることはいつでもそれを超えます。
　人を「神の子とする恵みの世界」は、どんないびつな状況の中に生きる人々のためにも向けられているものです。
聖書は、キリストを「すべての人を照すまことの光」である語ります。
わたしたちの時代と世界と、そして身近な人々の抱える問題や、抵抗というものの大きさに圧倒されるようなこと、ダメだと思うようなことかもしれません。
　それでも、神さまは不思議をなさる方であることを忘れずに、自分の状況で「お父さま」と神を呼び求めましょう。
　わたしたちは、神さまとの特別な関係に入れていただいているのですから。